（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	飯田 玲子
論文題目	インドにおける大衆芸能と都市文化 —観衆と共に現代を生き抜くタマーシャー—		

（論文内容の要旨）

本論文は、インド・マハーラーシュトラ州の芸能タマーシャーの現代的な変容を分析し、その社会的意味を現代インドにおける大衆芸能と都市文化という観点から理解することを試みる。1980年代に至るまで、タマーシャーは村落を中心に活動する民俗芸能であり、しばしば売春と結び付けられて理解されていた。しかし現在タマーシャーは、マハーラーシュトラ州の代表的な都市文化として成長しており、幅広い層に支持されるポピュラー・カルチャーとして重要な位置を占めるに至っている。本論文は、タマーシャーの現代的な変容を描写すると共に、それが多様な市民に支持される大衆芸能および都市文化としていかに成長し得たのかを都市をめぐる社会変化との関連で理解することを試みる。

第1章は、先行研究を検討し、本論文の位置付けを論じる。従来の研究は、現代インドの都市文化は新中間層を主体としており、消費経済や宗教ナショナリズムに寄与するものであると理解されてきた。それに対して本論文では、新中間層のみではなく多種多様な大衆の存在に注目し、彼らのコミュニケーションを媒介する都市文化としてタマーシャーを捉える視角を提示した。

第2章では、タマーシャーとラーワニー（女性による歌舞）の歴史的展開について論じた。タマーシャーは、もともとムガル帝国あるいはマラーター王国の軍営での娯楽を起源としているが、植民地期には都市でのパトロンを失って、主に農村を中心に演じられる芸能となった。演者のタマスギールたちは、農村の階層関係を前提としたパトロン制度に依存しながら生きてきた。

第3章では、タマーシャー芸能の継承と再生産について論じた。タマーシャーは、他のインド古典芸能に見られるようなガラーナー・システム（流派別の師弟制度）を保有せず、タマスギール間の緩やかな関係のなかで、芸の継承がおこなわれている。また、決まった舞踊の型が存在しておらず、その時々の流行や、他のインド古典舞踊、映画などで用いられる身体動作を柔軟に取り入れながら、今日まで存続してきた芸能である。タマーシャーの重要な性質は異種混淆性と柔軟な可変性にある。

第4章では、1990年代以降におけるタマーシャーの社会的位置付けの変化について論じた。1980年代までは農村の社会経済的階層関係に埋め込まれた民俗芸能であったタマーシャーは、90年代に入るとムンバイーやプネーの都市部で盛んに上演されるようになり、そのパトロンは多様な都市大衆となった。マハーラーシュトラ州政府も、タマーシャーを州の伝統芸能として保護育成しはじめた。タマーシャーやタマスギールについ

ては、新聞やテレビ、インターネットなどで盛んに情報が発信されるに至った。また、VCDや写真集などの販売を通じて芸能の商品化が進んでいることも指摘した。

第5章では、ラーワニーの身体動作と詩がメディア媒体の変化にともなってどのように変化したのかについて論じた。従来は舞台空間のなかでおこなわれ、踊り子と観客との間身体的な関係の中で成立していた芸能であったタマーシャーは、メディアに乗ることによって、観客が現前しなくとも成立可能な、記録され観賞される芸能へと変化を遂げた。クローズアップを含む写真やビデオなどを通した観賞が増えるなかで、踊りだけでなく表情やポーズが重要な要素を占めるようになった。ラーワニーの詩の内容は、性愛を直接的に示唆するものから、多様な都市大衆が自らの欲望と夢を投影できる多義的な解釈を可能にするものへと作り直されている。

終章は結論である。大衆芸能たるタマーシャーは1990年代から現在のインド・マハーラーシュトラ州において、さまざまな人々が自らの情動や価値を託して自己イメージを構築し、語り合うための重要な文化的媒体としての機能を果たしている。つまり現在のタマーシャーは、もはや農村の民俗芸能ではなく、多様なアクターが交わる都市において、人々が個や社会のありかたについて相互的なコミュニケーションを行うための都市文化として成長している。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

従来のインド芸能研究においては、「伝統の創造」の観点からいかに芸能がネーションの伝統文化や市場の商品として再構築されたかを分析したり、あるいは「アイデンティティ・ポリティクス」の観点からいかに芸能が特定集団のアイデンティティを示す記号として利用されているかを指摘するものが多かった。そしてその際には、国民文化や文化産業そしてアイデンティティ・ポリティクスを主導して文化変容をもたらすのは中間層エリートであると前提されてきた。そのなかで大衆は、中間層エリートによってつくられた文化を受け取り、政治的に動員されたり、消費したりする受動的な存在として描かれてきたのである。しかしそうした観点からは、現代インド・マハーラーシュトラ州の代表的な大衆芸能かつ都市文化として成長しつつあるタマーシャーが、庶民や新中間層そしてさまざまなカーストや宗教集団を含む多様な人々に自らの文化として支持されるポピュラー・カルチャーとして人気を博していること、またそうした多様な社会文化・政治経済的な立場をもつ人々がタマーシャーをめぐってさまざまな議論を交わしていることを十分には説明できない。

本論文は、こうした状況を踏まえた上で、タマーシャーの現代的変容のもつ社会的意味を考察し、現代インドにおける大衆芸能と都市文化のありかたを再検討しようと試みる。そのために長期のフィールドワークに基づいて、タマーシャーが、農村男性を中心的なパトロンとする民俗芸能から、多様な大衆が関わる都市文化へと変容してきた過程をつぶさに検討している。

本論文の意義としては以下の三点が挙げられる。

第一に、現代インドにおける代表的な都市文化として重要性の高い大衆芸能タマーシャーを取り上げ、その現代的変容にかかる基礎的なデータを収集し提供したことである。タマーシャーは、従来のインド芸能研究において取り上げられることが少なく、既存の研究蓄積は厚いとは言えない。長期のフィールドワークにおけるインタビューと参与観察から得られたライフヒストリーや映像記録、関連の個人や施設から収集した写真、フィルム、パンフレット、台本などのデータは貴重なものである。

第二に、タマーシャーの現代的変容を社会変化およびメディアとの関連で説得的に分析してみせたことである。大衆芸能としてのタマーシャーは固定的な型を継承するよりも、観客の受けを重視して、異種混淆的にさまざまな要素を取り入れながら、柔軟に自らを変容させてきた。観客が舞台をみる農村男性から画像を通じた多様な都市大衆に変容してきた中で、タマーシャーは、対面的な性愛をテーマとするものから、さまざまな人々が自らの求めるおしゃれなエロスを読み

込むことのできる多義的な表象へと変化したのである。本論文はこのことをさまざまな身体動作や詩の分析、その解釈をめぐる多様な人々の語りを参照しながら、説得的に論じている。

第三に、現在のタマーシャーの分析を通じて、現代インド都市における大衆芸能と都市文化のありかたを考察することによって、多様な大衆を主体とするコミュニケーションの場としての大衆芸能および都市文化の可能性を指摘したことである。本論文は、タマーシャーが1990年代から現在のインド・マハーラーシュトラ州において、多様な大衆が自らの欲望や夢を投影し、自己イメージを構築して語り合うための重要な文化的媒体としての機能を果たしていると論じている。こうした指摘は、従来の芸能の記号論的分析や政治経済的な機能の指摘を超えて、多様な社会集団や文化要素が混じり合う都市空間で、大衆芸能が積極的な文化構築の役割を果たす可能性を示唆するもので、きわめて興味深い。

以上のように本論文は、タマーシャーの現代的変容を緻密に検証することによって、現代インドの大衆芸能および都市文化についての新たな理解の可能性を示した優れた研究である。それは南アジア地域研究および芸能研究に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。